

は じ め に

この巻では「住む」をテーマにしています。

日本では「木でつくられた家」に住んできた歴史があり、西洋では「石でつくられた家」に住んできた歴史があります。

家に入るとき、日本では当然のように靴を脱ぎますが、西洋では靴をはいたままの人が少なくありません。

衣類などを収納するとき、日本では引き出しを使う「箆笥」を用いていましたが、西洋では服を吊るす収納の「クローゼット」を使います。

なぜこういったちがいが、生まれたのでしょうか。

この本では、こういった日本と西洋の「住む」ことに関するちがいを10個紹介しています。

自分のこと、自分の国のことは、普通だと思いがちです。でもこうやってくらべてみることで、どちらにも個性があり、どちらも特別で、どちらにも独自の背景があることがわかるはずです。

日本は、明治維新、そして太平洋戦争の敗戦といった契機を経て、くらしが大きく西洋化しました。日本ならではの文化というものも、年々、減ってきています。ただ、日本らしい衣食住が生まれた背景には、この国がもつ四季や自然環境などが大きく関わっています。いわば必然として日本らしい衣食住は生まれてきたのです。

この本が、日本らしい衣食住に気づき、そのよさに気づききっかけになりますよう。また西洋、そしてこの本で紹介しきれなかった多くの諸外国にも、日本と同じように独自の文化があることに気づききっかけになってくれたら嬉しく思います。

おかへ たかし
岡部 敬史

も く じ

木の家	4	と 石の家	6
靴を脱ぐ	8	と 靴を脱がない	10
布団	12	と ベッド	14
湯船	16	と シャワー	18
和式トイレ	20	と 洋式トイレ	22
日本と世界のイメージのちがい～なぜ少し前の日本には4号室がなかったのか～	24		
箆笥	26	と クローゼット	28
囲炉裏	30	と 暖炉	32
物干し台	34	と バルコニー	36
しめ飾り	38	と クリスマスリース	40
日本庭園	42	と 西洋庭園	44
日本と世界の思わぬちがい～日本のカレンダーはメモを書き込むスペースが大きい～	46		

木の家と石の家

日本では長年、家を木でつくってきました。一方、西洋では石でつくった家に住んでいました。こういったちがいが生まれた理由のひとつは、その材料の入手しやすさです。日本には良質な木が豊富にあったのに対して、西洋には良質な石が身近にあったのです。また地震が起こりやすいか否かも要因のひとつです。日本と西洋の家の素材を見てみましょう。

日

JAPAN

本

木の家

良質な木材が身近にあったこと、また夏の気温が高いことから、日本人は木を材料とした家に住んできました。木を使った建築技術が大きく発展したのは、飛鳥時代のこと。大陸からの技術者集団を重用した厩戸皇子(聖徳太子)は、法隆寺など重要な木造建築物を今に残しています。



木造建築の街並み

日本人は旧石器時代には、もう木の家に住んでいたと考えられています。もちろんはじめは、倒れていた木を岩などに立てかけてつくるなどした簡素な家でしたが、やはりその材料は木でした。現在も、日本の森林面積は、国土全体のおよそ3分の2ですから、身近に木がたくさんあったのです。



日本で木の建築が大きく発展したのは、飛鳥時代のこと。仏教が伝来した後、朝鮮半島にあった百済という国から寺院建築の専門技術者が日本に来ます。このとき日本の政治を司っていた厩戸皇子(聖徳太子)が、この職人に寺院をつくらせたことが契機になり、日本の建築技術は発展していきます。



なお厩戸皇子(聖徳太子)がつくらせた奈良県の法隆寺は、現存する最古の木造建築です。

木の家のよさは、木が湿気を吸収したり吐き出したりしてくれるので、家の中が夏は涼しく、冬は暖かいことです。また木は石などの建材にくらべて軽く柔軟性があるので、地震が多い地域にも向いています。まさに日本の風土に合った素材です。

ただ、そんな木の家にも弱点はあります。その最たるものが火災です。江戸時代、最盛期の江戸の街には100万人を超える人が木でつくられた家に住んでいたわけですが、一度、どこかで火災が起こると、その火は次々と燃え広がり、たびたび大きな被害を出しました。明暦3年(1657年)に起こった「明暦の大火」では、火が2日間にわたって燃え続け、江戸の街のおよそ6割が焼失し、10万人を超える人が亡くなったと伝えられています。



石の家

日本の家が木でつくられていたのに対して、西洋の家は石でつくられてきました。石の家は、日中に太陽から受けた熱を蓄えやすいことや、劣化しにくいこと、火災に強いことなどの利点があります。ヨーロッパには数多くの古い街並みが残っていますが、それは家が石でつくられているからです。



日本が木で家をつくってきたように、西洋では石で家をつくってきた歴史があります。とりわけギリシャやイタリアなど地中海性気候の土地には、石灰岩という加工しやすい石が豊富にあり、石で家をつくる技術が発展しました。

石でつくった家には、西洋の気候に合った利点があります。

まず、太陽の熱を蓄えられること。日本に比べると気温が低いところの多いヨーロッパでは、熱を保ってくれる家の方が適しています。

次に、内部に柱が不要なこと。西洋には木が不足しているところもありますが、石やレンガで

頑丈な壁をつくれれば、木の柱はなくても家をつくることができます。

木より劣化しにくく火災に強いことも大きな利点です。ヨーロッパには、数百年も前からの街並みが残る都市が多々ありますが、これは家が石でつくられているからです。日本の木造家屋の多くは、年を経るごとにその価値は下がりますが、石の家には、年を経ることで価値が上がる家がたくさんあります。そんな家々が今でもたくさん残っている街並みは、ヨーロッパの観光名所にもなっています。スイスのベルンは、1405年に起こった大火災の後につくられた家々が残り、中世の街並みを今でも見ることができます。他にもエストニアのタリンや、チェコのプラハ、イタリアのアマルフィなど、古い街並みは多数あります。日本は、寺院建築などに古いものが残っていますが、街全体、それも数百年たった家々が今に残ることは稀です。

ただ、石の家は崩れたときに大きな被害を出すため、地震が多発する地域には不向きです。



江戸時代の「破壊消防」とは

火事が多かった江戸の町には「町火消」と呼ばれる、今の消防団のような組織があり、1万人ほどの人が働いていたとされます。消火道具には、竜吐水という水を吐き出すポンプのようなものもありましたが、水道が未発達であったため、水だけで火事を消し止めることは困難。そこで役立ったのが、刺又や鷹口と呼ばれる長い棒の先に金具がついた道具で、これで木の家々を壊し、火がその先に燃え移ることを防いだのです。こういった消火活動は「破壊消防」と呼ばれ、江戸時代の消火活動の基本になっていました。

